

書 評

『私の知的遍歴 哲学・時代・創見』  
(山脇直司著 デーリー東北新聞社)

渋谷 節子

テロリズムの脅威、原発事故の問題、気候変動と環境破壊、民族や宗教の対立など、様々な問題が今日の世界を揺るがせている。どの問題も「政治の問題」「科学の問題」、あるいは、「文化の問題」と片付けることはできず、そこでは幾つもの要素が重層的に絡み合っている。人間の社会的活動、政治的活動、経済的活動、科学的活動、文化的活動は常に密接に関わり合っており、全体で人々の日々の生活を織りなしているからである。そして、グローバル化が進む現代は、それらはより複雑に絡み合い、ある地域で起きた問題もグローバル化の波に乗って世界へ広がっていくため、どれだけの人々の生活に影響があるか計り知れない。それだけに、問題の解決には世界のひとりひとりの参加と協働が必要になる。現代はそういう時代だと言うことを、山脇氏の自伝とも言うべき本書を読んで改めて、強く思った。

氏が、本書の中で強くその重要性を訴えているもののひとつに「グローカル」という概念がある。氏は、「グローカル」という言葉を「それぞれの地域や現場に即しながら地球的な意味を持つ」(p.125) という意味の形容詞として用いている。いかなる人もある国のある地域で暮らしているという意味で、ローカル性を持っている。他方、グローバル化が急速に進む現在、地球上の多くの人々が地球規模のものや現象と無縁ではなくなった。また、現在の世界では、開発や近代化は、ほぼそのまま「グローバル化」を意味しているように思われる。そして、この「ローカル」と「グローバル」が人々の生活の中で並存した時に、氏が述べているように「グローカル」な場が生まれるのであろう。

しかし、「ローカル」と「グローバル」が衝突した時はどうだろうか。現在の世界で起きている問題の多くが、この「ローカル」と「グローバル」の衝突に根を持っているのではないかと、私は考える。現代に生きる私たちが直面している最も大きな問題の一つにテロリズムがある。イスラム原理主義者によるテロリズムは、それ自体許されるものではないとは言うまでもない。しかし、テロリズムの背景に何があるのかを考えた時、そこには、グローバル化のもとで進む文化の西洋化、キリスト教化、あるいはアメリカ化に対する抵抗、さらには、恐怖感があるように思われる。本書の第3部で山脇氏も、2015年にパリで起こった週刊紙『シャルリー・エブド』への襲撃事件に言及して、「フランス国民であるのに種々の社会的差別を被っているムスリム(中略)への配慮が乏しく、その意味でこの週刊紙には『多文化共生』のみならず、『社会的公正』の視点が欠けていたと言わざるを得ないだろう」と述べている(p.180)。この意見には、私も全く同感である。

その題名の通り、本書を読むことにより読者は著者の「知の遍歴」を追体験することができる。幼少期から高校時代までの思い出が描かれた第1部からは、多少複雑な事情がありながらも、氏が暖かい家庭で豊かな愛情を受けながら育ったことが窺える。氏の温和人柄は幼少期に育まれたものなのかもしれないと感じることができる、幼稚園や小学校、中学校時代での教師や友達との逸話の数々は、読んでいて楽しい。また、故郷の青森県や八戸への深い思いも、大学に進学するために東京に出るまでを、この地で過ごした思い出から来るものであろう。氏の「グローバル」の思想が、ローカルでありながら世界に目を向けた人物を生み、世界に誇る自然を有する故郷の青森県の中で育まれて行ったことも、想像に難くない。

第2部の「大学時代から現在までの知的遍歴」では、山脇氏がどのようにして、現在の「公共哲学」を提唱するに至ったかがよくわかる。中でも、最も氏の思想形成に直接的な影響を及ぼしたのは、やはりミュンヘン大学への留学の経験ではないだろうか。学位論文では、当時進行中であった批判的合理主義と超越論的プラグマティズムの論争の背景にある「『双方が（暗黙のうちに）追求している理想的な学問の主体』という視点を導入して切り込んだ」と述べられている（p.82）。私のように哲学の素養にかけるものには難解なテーマであるが、「理想的な自然科学の主体、理想的な社会科学の主体、理想的な哲学の主体に分化して」論争を分析したものであり、それは、今日に到るまで「あるべき学者像」を考えるための原点になっていると言う。この時期に真摯な哲学者としての山脇氏が誕生したことを、異国ドイツで研究に励む氏の姿を思い浮かべながら、感慨深く思った。

帰国後に東海大学、上智大学、そして東京大学で教鞭をとりながら氏が進めた研究は、さらに、様々な哲学的、社会的なテーマへとその幅を広げて行く。氏の研究対象は、自然、文化、歴史など人間の生活、そして、人生に関わる多様な事象に及んでおり、その研究過程で、氏の中で哲学と人々の社会が切っても切れないものとして結びついて行ったのであろう。こうして、「公共哲学者」としての山脇氏が形成されて行ったことが窺える。しかし、思えば、こうした社会への関心は、第1部で書かれている幼少時代から育まれていた。幼い頃から格差社会への疑問を持ち、中学、高校とその思いが高じて、大学では経済学を専攻したと、氏は明かす。

現在では、山脇氏が日本の公共哲学を代表する研究者であることは言うまでもないが、星槎大学の副学長を務め多忙を極める現在でも、その精力的な研究活動は衰えることなく続いており、「共生のための経済哲学・経済倫理」や「メディアの公共哲学」と言った現代的な問題への関心も高い。さらに、今後は「21世紀の現代哲学」の展開を目指しており、そのテーマは「1. 自然における人間の位置」「2. 科学・技術の進歩と社会倫理」「3. 文化と歴史の多様性と普遍的価値」「4. 人間と政治の関わり方」と、実に多岐に渡っている。しかし、そのどれもが、現代の世界に生きる人間にとって根源的なテーマである。氏は、公共哲学を「善き公正な社会を追究しつつ、現下の公共問題を市民と共に論考する学問」と定義づけている（p.97）。今後も、より善き社会の実現のために、精力的な研究を続けられ、社会に貢献されることを期待して止まない。

研究者、学者としての活動や思想について深く書かれている第2部に対して、氏の考えを

より身近に感じ取ることができるのが、第3部である。コラムやスピーチ、そして小論が集められたこの部を氏は「極めて真摯な内容」(p.3)と名付けており、ここでは氏の哲学者としての思想だけではなく、人間としての魅力にも触れることができる。テーマは、福島原発の問題、沖縄の問題、教養教育、WAの哲学、公共哲学、共生科学、現代の政治、さらには、健康と非常に多様であり、氏の関心が社会的な事象だけではなく、人間の生き様にまで及ぶことが見てとれる。

ここでは、特に、氏が以前から講演会などで語っている「活私開公」という考え方について触れたい。「活私開公」とは、「私という個人一人一人を活かす形で他者と関わり、人々の公共活動や公共の福祉を开花させるライフスタイルを意味する」と、氏は述べている(p.135)。ひとりひとりの個性を十分に活かすには、他者による配慮や他者との協働が必要であり、そこには思いやりの精神が生まれると、氏は考えている。人間というのは、自分の力で生きているつもりでも、一人で生きて行くことはできず、実は、周りの人たちとの関係性や社会の中で生かされているものではないだろうか。今日、学校におけるいじめや職場でのハラスメント、過労自殺など悲しいニュースを耳にすることが多いが、誰もが人との関わりの中で自分を活かすことができる、生き生きとした社会が形成されることを願って、「活私開公」の思想を広く世に送り出したい。

